東洋英和女学院 学院報
TOYO EIWA JOGAKUIN
PUBLIC RELATIONS REPORT
2018.01.31
No.85

楓園

ふうえん

特集1
深井 智朗 院長就任

特集2
ミス・カートメルの思いを受け継ぐ
東洋英和のキリスト教教育

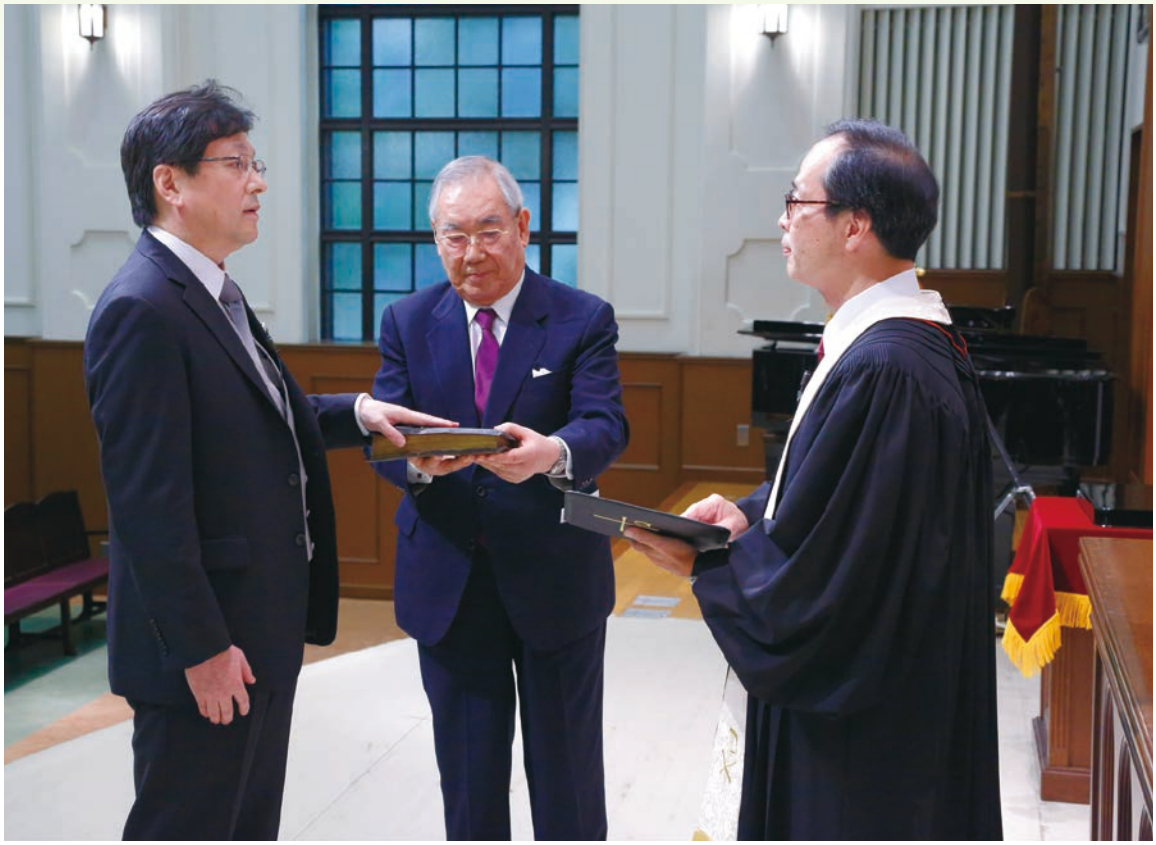
NEWS 大学・大学院／中高部／小学部／
東洋英和幼稚園／大学付属 かえで幼稚園／学院 ● 7
この人に聞く 益田 由美 ● 13
聖書の言葉／訃報／史料室レター ● 14
英和星空探訪／同窓会より／後援会より／お知らせ ● 15

深井智朗院長 就任式
2017年9月29日に新マーガレット・クレイグ記念講堂で行われた就任式には、来賓および学院関係者約200名が出席。
10月1日付で就任した深井院長のもとで、東洋英和女学院の新しい歩みが始まりました

東洋英和女学院
http://www.toyoeiwa.ac.jp

深井 智朗 院長就任

深町正信前院長の任期満了に伴い、院長選考委員会での協議を経て、二〇一七年七月二十一日に開催された臨時理事会において深井智朗新院長が選任され、一〇月一日に就任しました。九月二九日に行われた院長就任式の様子を写真でお伝えするとともに、深井院長と深町前院長からのメッセージをご紹介いたします。



2017 年 9 月 29 日　院長就任式
初代校長ミス・カートメルの聖書に手を置いて、深井新院長が宣誓を行いました
（左：深井智朗院長、中央：深町正信前院長、右：髙橋貞二郎学院宗教部長）

ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。

コリントの信徒への手紙二　四章七～九節

心を高くあげよ

第三三代院長　深井　智朗

今から三〇年も前のことです。その頃住んでおりましたアウクスブルクの町でカトリック教会の司教の着座式がありました。この町の教会を指導する新しい司教が選ばれたのです。世界最古のステンドグラスがある大きな教会でその式は行われました。カトリックの教会ですから荘厳な衣装を身にまとった、威厳に満ちた司教たちが入場し、その式ははじまりました。式の中で、新しく司教となる司祭が神と会衆の前で誓約をします。その姿を忘れることはできません。新しい司教はどのように誓約をしたのでしょうか。彼は誓約にあたって姿勢を正すのでも、ひざまずくのでもなく、聖壇から降りて、会衆の前で、人々が座っているその足元でうつ伏せになったのです。両手を左右に広げ、まさに上から見れば十字架のような姿になり誓約したのです。そして司教は、床に顔をこすりつけるようにしながら、三度ラテン語で「私をお選びになられた神よ、あなたに私のすべてを明け渡します」と叫ぶのです。そして誓約が行われる間ずっとそのままの姿でした。そして司式をする司教が誓約の最後に「私の羊を養え」とラテン語で告げると、司教は立ち上がるのです。そして新しい司教はこういうのです。「スルスム・コルダ(sursum corda)」、「心を高くあげよ」。

深井（ふかい） 智朗（ともあき） 院長　プロフィール

一九六四年生まれ。東京神学大学大学院博士課程前期課程修了、アウクスブルク大学哲学・社会学部博士課程修了。Dr. Phil.（アウクスブルク大学）、博士（文学）京都大学。日本基督教団東京教区教務教師。

聖学院大学教授、金城学院大学教授を経て、二〇一六年四月より東洋英和女学院大学人間科学部保育子ども学科教授・学院宗教部長（横浜校地）、同五月より東洋英和女学院理事・評議員、二〇一七年四月より副院長・常務理事、同一〇月より院長。

専門分野はドイツ思想史、キリスト教思想史、教育思想史。

著書に『超越と認識』（創文社、二〇〇四年）、『ヴァイマールの聖なる政治的精神』（岩波書店、二〇一二年）、『パウル・ティリヒ』（岩波書店、二〇一六年）、『プロテスタンティズム』（中央公論新社、二〇一七年）他。

趣味はヨーロッパの古書店、アーカイブや美術館を訪ねること。以前は料理も。

愛唱聖句は右ページ冒頭のコリントの信徒への手紙二　四章七～九節、愛唱讃美歌は三三八番「主よ、終わりまで」。

式が終わってから、一緒に出席した友人に新しく就任する司教がうつ伏せになって誓約したことに驚いたと述べますと、これは一四世紀から続く伝統だと教えてくれました。司教に就任する際、誰によってこの職を与えられたのかということを明らかにすること、そして間違っても司教になることで傲慢になったり、また自分の使命を誤って理解し、権力や名誉を手に入れることだと思わないために、誰よりもへりくだって、地べたにうつ伏せになって、誓約をするのだと教えてくれました。

就任式の朝、三〇年前の出来事を思い起こしながら六本木に向かいました。そしてこう考えました。この姿はマーサ・カートメル先生から第三二代院長として四年間ご奉仕くださった深町正信先生に至るまでの本学院の院長の姿でもある。先生方はみなこの学院を心から愛し、先生方の豊かな才能のすべてを捧げてこの学院に仕え、指導してこられました。しかし先生方はみな誰よりも謙虚で、献身的で、この学院とそこで学ぶ者、働く者に仕えてこられました。まさに神を愛し、隣人に仕えてこられたのです。

私はこの職に就くにあたり、この精神を先生方から受け継ぎ、学院とここで学ぶ者、働く者のすべてに仕える者となり、「喜ぶ者とともに喜び、悲しむ者とともに悲しむ」者となることを神の前で約束したいと思います。

わが国の教育機関が置かれている状況は決して楽観できるようなものではありません。本学院も例外ではありません。幸いなことに本学院は神のご恩寵のもと、また歴代の優れた学院指導者たちによって守られ、今日の姿にまで発展してきました。しかしそれでもいくつもの難題の前に今日の教育機関は立たされていると思います。社会的、経済的な要因もありますが、教育システムそれ自体が問われている時代なのです。変わらねばならない、勇気をもって変えてゆかねばならないことがあるはずです。決断しなければなりません。それが東洋英和女学院の将来を生み出すことになります。しかし他方で変えてはならないものがあります。それは本学院が建学以来一三三年間それを堅持してきたキリスト教の教えに基づく教育です。院長の職務はこの二つのこと、建学の精神の堅持と、それに基づいた将来の学院のヴィジョンを共に描き出すことだと考えています。

これからご一緒に歩いて行きましょう。一緒に考え、悩み、議論し、決断し、東洋英和女学院という大きな船を約束の地へと導いて行きましょう。これまでの本学院の歴史は神の導きのもとに祝福された歴史でありましたが、いつも平穏であったわけではありません。困難な時にこそ、大きな課題に直面した時にこそ、壁や隔てを超えて、ひとつになって問題と取り組み、戦おうではありませんか。ここで学ぶ園児、児童、生徒、学生、院生のために、ここで働く全ての者たちのため、同窓生の方々、この学院に連なるすべての関係者の方々のために。これからなさねばならないいくつもの大きな課題と取り組むために心をひとつにし、心を高くあげ、学院の将来のために、一緒に歩んで行きましょう。

一九〇〇年に完成した木造校舎が、その建築中にやってきた台風によって二度も倒壊した時、イサベラ・ブラックモア先生は大きな痛みと困難の中で、生徒や職員にこう呼びかけたことはこの学院を愛するすべての者がいつも思い起こすことです。「雨のあとには虹が出ます。恵みの虹を信じましょう。」みなさん。愛する東洋英和女学院のみなさん。一緒に「恵みの虹」を見ようではないですか。

院長就任式次第

司　式　学院宗教部長　高橋貞二郎
奏　楽　学院オルガニスト　河野　和雄

前　奏
招きの言葉　詩編　33編12～15節
ヨシュア記　1章　5～　9節
讃美歌　21－18
聖　書　歴代誌下　1章7～12節
祈　祷
新院長選任の経過　理事長　大宮　溥
誓　約
祈　祷
讃美歌　21－520
就任の辞　新院長　深井　智朗
祝　辞　キリスト教学校教育同盟常任理事 立教学院副院長　西原　廉太
静岡英和学院院長　柴田　敏
山梨英和学院院長　大島　征二
教職員代表・高等部長　楠山眞里子
校　歌　伴奏　中高部教諭　武田　ゆり
頌　栄　21－88
祝　祷
後　奏
挨　拶　常務理事・法人事務局長　西田　哲也

前院長からのメッセージ

神の導きを感謝して

第三二代院長　深町　正信

深町前院長と深井院長（2017年9月　新マーガレット・クレイグ記念講堂にて）

私が東洋英和女学院に関わりをもたせていただいた最初は一九六七年から一九六九年まで東洋英和女学院高等部の聖書科の非常勤講師としてでした。その当時の生徒たちはみな明るく、元気で、活発で、聖書の授業がとても楽しかったことを思い出します。次は、一九七八年から一九八八年までの一〇年間、東洋英和女学院短期大学、大学の非常勤講師としてキリスト教学を担当させていただいた時期でありました。そして、二〇一二年に、私ははからずも故池田守男理事長・院長のとき、東洋英和女学院の評議員、そして二〇一三年には理事に選任され、また常務理事をお引き受けすることになりました。

ところが、五月の常務理事会が開催されたとき、池田理事長の姿が見えず、しばらくして、当時の村上学長、吾妻副院長、西田法人事務局長が呼び出され、退席されて、だいぶ時間を経て、戻って来られると、池田理事長がたった今、病院で亡くなられたとの報告がなされ、一同、驚愕いたしました。更に、池田夫人も、その一週間前に、同じ病院ですでに召天されていたことが報告されて、一同、しばし呆然といたしました。

東洋英和女学院の寄附行為等に則り、直ちに常務理事の最年長者であった水澤郁夫氏を理事長代行として、今後の諸対策を話し合い、最後に、私に祈祷を求められたので心をこめて、ご遺族の上に主の平安と慰めを、また、東洋英和女学院の今後の歩みの上に確かなお導きをと、一同でお祈りを捧げました。

その後、正式に、水澤郁夫氏が常務理事会、理事会の審議を経て、新しい理事長に選任されました。そして、第三二代の院長として、不肖、私が選任されることになりました。しかし、二年後、二〇一五年十二月三日に、水澤郁夫理事長が突然、主のもとに召されたため、ここに、長年、東洋英和女学院の理事、評議員をされてこられた現在の理事長の大宮溥先生が新理事長に選任され、そして、現在に至っています。

この間、主は、この年創立一三四年目を迎えている東洋英和女学院の真の主として常にその歩みを守り、導き、支えていてくださいましたことを思い起こしますとき、この女学院の大黒柱である主イエス・キリストへの感謝の思いでいっぱいであります。

今般、私は院長の任期を全うし、八一歳という高齢者である私にもかかわらず、今日まで多くの女学院の関係者の方々の熱心な祈りとご支援とに支えられて、二〇一七年九月三〇日をもって、無事に、東洋英和女学院の院長職を退任することになりました。

幸いにも、新院長には牧会経験の豊かな、かつ、学者としても優れた、主にあって敬愛する副院長の深井智朗氏が東洋英和女学院の第三三代院長としてご就任くださることになりましたことは誠に嬉しい限りであります。

この新院長のもとで、東洋英和女学院がますますキリスト教学校として、敬神奉仕のスピリットに生きる女性を、一人でも多く養成し、国の内外に送り出し、平和な世界の建設と新しい日本の社会の発展に寄与する女性を一人でも多く輩出してくださることを期待し祈り、私のお別れの言葉とさせていただきます。

ミス・カートメルの思いを受け継ぐ
東洋英和のキリスト教教育

学院宗教部長　髙橋　貞二郎

一八八四年、ミス・カートメルは、東洋英和女学校で聖書を土台とした キリスト教教育を始めます。そのキリスト教教育には、二つの目的がありました。 伝道と「キリストの福音」に基づく教育です。 その思いは現代も受け継がれて展開され、「敬神奉仕」を実践する人を育み 豊かな実を結んでいます。今回は、その内容をお伝えします。

初代校長ミス・カートメルは、WMS（カナダ婦人ミッション）から派遣された宣教師でした。WMSは、「全世界へ行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」（マルコによる福音書一六章一五節）を標語に一八八一年に結成された団体です。

メンバーのひとりであったミス・カートメルは、標語となった聖句を心に留め、神からの呼びかけに応えて来日したのでした。そんな彼女は、東洋英和で伝道と「キリストの福音」に基づく教育を展開します。創立当初の様子などを調べると、そのことが良く伝わってきます。たとえば、平日の学校生活は次のようなものでした。

八時一〇分から三〇分まで礼拝（全クラスの生徒が講堂に集まり、ミス・カートメルが司会を担当しました）。その後、午前は「邦学」（日本語で作文・読方・数学・漢文・習字の授業が行われました）、十一時三〇分から十二時までは牧師による「聖書講義」や宣教師による「信仰問答」の学びの時間。午後になると、「洋学（英語の授業）」が英語によって行われました。寄宿舎では毎夜、校長室に生徒・教職員が全員集まって礼拝を守ったといわれます。この礼拝は、上下の差別なく、家庭的な温かい礼拝であったそうです。

このようにミス・カートメルは、伝道と「キリストの福音」に基づく教育の両方を重視したキリスト教教育を展開し、後に標語となる「敬神奉仕」を実践する人を育んでいったのでした。ミス・カートメルの思いは途絶えることなく、次の校長となったミス・スペンサー、さらにはミス・ブラックモアをはじめ東洋英和に関わる宣教師方に脈々と受け継がれ実践されてきました。

マーサ J. カートメル（Martha Julia Cartmell）（1845 − 1945）

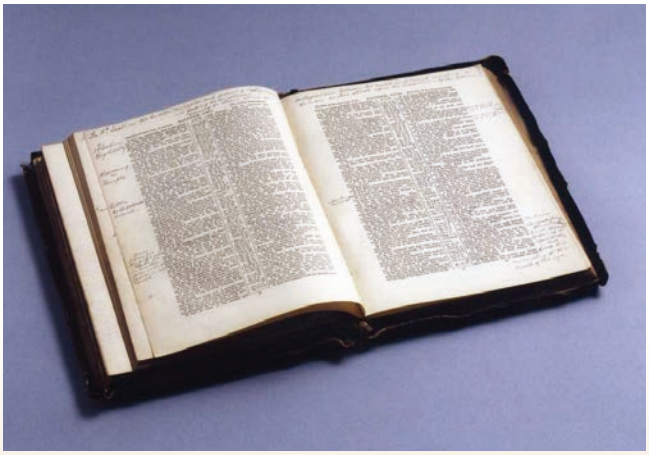
1882 年に撮られたもので、ちょうど日本へ来られた年のお写真です。この写真を撮られた 2 年後に東洋英和女学校が設立されます

ところで、東洋英和でのキリスト教教育を展開する中で、ミス・カートメルがとても大切にしていたものがあります。それは、聖書です。その思いを伝える貴重な資料が残されています。昨年の五月のことですが、史料室委員会から「東洋英和女学院　資料集　第五号　M.J.カートメル関係史料」が発行されました。その中に、ミス・カートメルが日本での働きを終えて、カナダに帰国されてから書かれた「女学校の教職員と生徒たちへのメッセージ」（一九〇九年八月執筆）が載っています。そこに次のように記されています。

神様は御言葉を従順に受け入れるすべての者の心を聖別してくださるのです。（中略）聖書を若い頃から愛読し学んできた私どもは、御言葉の中にキリストがいましたもうので、聖書がますます貴重でいつも新しく生命に満ちたものであるということに気づいています。年老いた者たちは人生の終わりの時に近づき慰めのために聖書が必要です。

ミス・カートメルは子どもから年老いた者たちまで、すなわち全ての人にとって聖書の御言葉が必要なことを知っていました。なぜなら聖書は、真の意味で人を生かすものであり、卒業してからも人生を支え、年老いた時には慰めと励ましを与えるものだからです。だからこそ、この聖書を大切にし、自らも御言葉に従った歩みをしたのでした。

現在、そのミス・カートメルの思いは幼稚園、小学部、中学部、高等部、大学、大学院に受け継がれ、それぞれの教育の現場で展開されて豊かな実を結んでいます。これからも、その思いが受け継がれて実践されていくことを心から願っています。



ミス・カートメルの聖書

先生が宣教師として日本に来られる直前から約四〇年間愛用され、多くの書き込みがされています。その後、同窓生齋藤春子氏のもとを経て五〇年前に学院に寄贈されて以来、東洋英和の歩みを見守っています。第三三代　深井智朗院長の就任式での宣誓にも使われました

各部で展開されているキリスト教教育

1947 年　中高部礼拝（左はミス・ダグラス）

1960 年　小学部 花の日慰問

東洋英和幼稚園

ミス・カートメル（1930 年頃）

幼稚園の子どもたちは日曜日に親子で教会学校に通い、礼拝を守り、一週間を始めます。そして、月曜日からの幼稚園では十分に遊んで心身を動かし、食前や降園前に神様に感謝と賛美の祈りを合わせます。さらに、時を定めて礼拝を守り、聖書の物語を聴き、私たちの友となられたイエス様を知るのです。イエス様に倣い、私たちもできることはないかしら―家族や友だち、困難の中にある国内外の方々を覚え祈ることを通して、「敬神奉仕」の活動へと導かれていきます。

子どもたちは一人ひとり神様から異なる賜物をいただいています。その賜物が生かされ、安心して園生活を送る中で、神様に愛されていることを子どもたちは実感していくのです。

小学部

小学部はどこを切っても「敬神奉仕」、と嬉しい評価をいただいたことがあります。キリスト教教育は礼拝・聖書科授業・キリスト教行事のときに限りません。聖書科以外の教科や学習活動でも、夏期学校など年間のあらゆる行事においても、また日常的な触れ合いの中でも、時をとらえてみ言葉に耳を傾け、神様を賛美しています。そして何より日々の子どもたち、教職員たち、保護者の方たちの祈りが、「敬神奉仕」の歩みをささえています。

写真は週に一度の全校礼拝と、毎日のクラスでの礼拝の様子（2 年）です。4 ～ 6 年有志による聖歌隊の奉仕は月 1 回ほどです。各クラスでは児童の当番が司会をし、オルガンも務めます。大好きな「お当番」です。

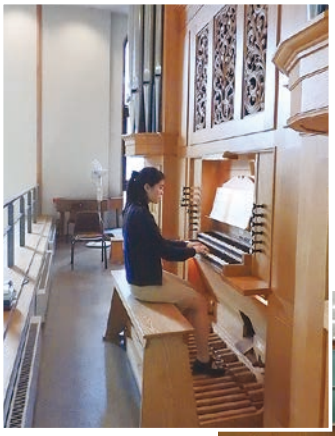
中高部

礼拝で始まり、祈りで終わる学校生活です。毎朝神様に愛されている者として他者を尊重し、ともに生きる恵みに感謝する礼拝をささげます（イースター音楽礼拝や花の日礼拝、クリスマス礼拝など、教会暦に沿った礼拝もささげます）。そして、終礼時に各クラスではお祈りをささげ、一日を終えます。

また日常生活から離れ、豊かな自然の中で聖書を学び、友人や先生方の話を心に留め、将来について語り合える中１オリエンテーションと高一カンファレンス、そして高三修養会が行われます。その中で中高部生活の最後の宿泊行事となる「高三修養会」（下の写真は高三修養会のキャンドルサービス）は、中高部でのキリスト教を礎とした生活の総括となる大切な行事です。

大 学

大学のキリスト教教育の柱の一つは礼拝です。授業期間中毎日行われている礼拝では、讃美歌を歌い、聖書を読み、教職員や外部講師によるメッセージ、時には学生による賛美に心を傾け、語られていることについて思いを巡らせます。クリスマスの時期には近隣の方も参加してコンサートやクリスマス礼拝を行います。もう一つの柱は授業です。学生全員が必ず受講するのが「キリスト教概論 A･B」です。キリスト教の歴史や人間・社会との関わり、東洋英和女学院とキリスト教に至るまでさまざまな視点からキリスト教について学びます。キリスト教と美術や教育など、更に学びを深めたい学生のための科目も開講しています。大学のキリスト教教育は二本の柱を大切に営まれています。



大学付属 かえで幼稚園

入園した子どもたちは、保育者の祈る姿とことばを通して「神様・イエス様」を知ります。やがて週に一度のクラスの礼拝で聖書に綴られている神様・イエス様のみこころを聞き、安心や希望や勇気を与えられます。それらが幼稚園をめぐる生活・遊び・関わり・行事…そのすべての支えとなっています。

かえで幼稚園のほとんどの子どもたちは卒業すると公立の小学校に進み、礼拝する日常からは遠ざかります。それでも祈ることを忘れない子どもがいることを聞かされています。幼児期に出会ってくださった神様・イエス様が、一人ひとりの道を支え続けてくださることを信じ、今日も明日も賛美と祈りの時を大切に過ごします。

「村岡花子記念講座」始まる

国際社会学部教授　与那覇　恵子

港区と学院の連携事業として二〇一七年に「村岡花子記念講座」が開設されました。『赤毛のアン』の翻訳者として著名な村岡花子は、児童文学者、歌人、教育者、編集者、社会活動家としても活躍し、女性のさまざまな可能性を示した学院の卒業生です。花子は遺言に著作権の一部を学院に寄付すると記しています。二〇一五年には村岡家から蔵書や原稿、書簡、身の回りの品々などが寄贈されました。花子は、東洋英和女学院が目指す教育の理念を体現してきた女性です。NHK連続テレビ小説「花子とアン」の人気もあり、花子の名を冠した講座の企画は二〇一六年から始まりました。

二〇一六年度の村岡花子記念講座開設企画セミナーのテーマは「日本の近代化とキリスト教学校」です。五回の講座は、女子教育においてキリスト教学校が果たした役割を見つめ直すものでした。登壇者は村上陽一郎前学長、加納孝代活水女子大学長、池田明史学長、深町正信院長、作家の村岡恵理氏、深井智朗宗教部長、学院史料室嘱託の酒井ふみよ氏、与那覇恵子教授でした。これからの社会における「女子教育とミッションスクール」などについて多彩な意見が開陳されました。各講座とも学院の歩みを、さらに未来につなげる糸口を示唆する刺激的なものでした。

二〇一七年度の「カナダと日本をつなぐ英語教育と文学の世界」では、より広い文脈で花子と学院を捉え、さらに学院ならではの教育を考えていくものでした。『赤毛のアン』の作者であるL・M・モンゴメリの研究者梶原由佳氏は、花子の精神にも多大な影響を与えたモンゴメリの人生を、深井智朗院長は花子とバージニア・リー・バートンを通して「生きる勇気」を、島創平教授はキリスト教と「開学の歴史的背景」を、笹島茂教授は東洋英和の英語教育から生まれる「異文化間理解力の育成」を語りました。

聴講した学生の「英和ってスゴイ！」という一言は、講座が今後も、豊かな広がりをもって展開していくことを確信させるものでした。

2017年度第1回・第2回講師　梶原由佳氏

SDGs（持続可能な開発目標）連続セミナー開催 これからの国際協力を考える

大学院国際協力研究科主任・大学国際社会学部教授　吉川　健治

国際協力研究科では、九月から「SDGs—国際協力の現在、未来」（全十一回）の連続セミナーを開催しています。SDGs（Sustainable Development Goals）は二〇一五年に国連が定めた「持続可能な開発目標」で、二〇三〇年までに貧困、環境改善など一七の目標を達成しようとするものです。グローバル経済格差、地球温暖化など国際社会には解決しなければならない問題が山積みされています。このままでは地球社会自体が「持続不可能」になってしまう恐れさえあります。SDGsは、こうした現状を回避して、誰もが心地よく生活できる社会を作り出すことが最終目標です。

地球的規模で変革を求めるSDGsの達成には、政府のみならず、グローバルに展開する企業、市民の関わりが必須です。セミナーでは、まず国連開発計画（UNDP）の駐日代表からSDGsの概要について説明いただき、SDGsの目標に沿って、グローバル企業の役員、保健衛生・教育のNGO活動家、グローバル・サプライチェーンと人権問題専門家など、各分野の第一線で活躍する方々にお話を伺いました。（十一月二二日現在七回開催）

第1回「SDGsと国際的な取り組み」講師
国連開発計画（UNDP）駐日代表　近藤哲生氏

これまでのセミナーから明らかになったのは、政府も企業も現状を変えたいと考えていることです。グローバル化が日常となっている現在は、生産活動も消費行動も世界のどこかと繋がっています。社会経済を持続可能なものにするためには、それぞれの主体が変革のために行動していくことが必要であること、これは各専門家の共通した主張でした。

今後の国際協力は、政府・企業・市民がSDGs達成に向けて政策立案や経済活動を展開していくことが主流となっていくでしょう。現在、未来の国際協力のあり方を考える上で、重要な視点を提供するセミナーとなりました。

吉川健治教授

研究室訪問

人間科学部人間科学科 佐藤 智美 教授

棚の上には、製本されたゼミ生の卒業研究集が並べてありました

名古屋大学大学院教育学研究科博士課程前期修了。スタンフォード大学大学院教育学研究科修了。名古屋大学大学院教育学研究科博士課程後期単位等認定。Ｐｈ．Ｄ．。二〇〇三年人間科学部人間科学科助教授就任。二〇〇四年教授、二〇一四年四月より人間科学部学部長。

――研究室ではどのように過ごしていますか。

学部長になってから、研究室にいられる時間がすごく短くなってしまいましたが、在室時はたいていパソコンの前ですね。学生が来て、レポートの個人指導をすることもあります。

――先生のご専門、現在の研究テーマを教えてください。

専門は教育社会学です。大学の卒業論文テーマの延長線上で研究しています。現在は、特に家庭環境が不利な条件のもとにある子どもたちの学力や社会性の発達などに関心があります。また、カナダの貧困対策や子どもの学力支援をしている支援組織の調査研究もしています。

――人間科学科の花子プロジェクト(※)を立ち上げられました。

日本は先進国の中でも子どもの貧困率がとても高く、そのような子どもたちを支え、将来のビジョンを描けるようにしないと、子ども個人にとっても社会にとっても損失が大きいのです。この問題に、大学教員という今の私の立場でできることはないかとずっと考えていたところ、池田学長に後押ししていただいて、二〇一七年度から発足させることができました。しかし、制度ができるまでの間、いろいろな施設の状況を聞き、このプロジェクトが現状に沿えるかということを柔軟に考えなければいけませんでしたし、入試だけでなく、入学してから卒業まで、無事に社会へ移行するまでの支援ですので、こちらの関与も重要と考えています。人間科学科に受け入れた学生を確実に社会に繋げる、経済的にも精神的にも自立するところまでつないでいく、だからプロジェクトなのです。花子奨学生の学生たちは、入学後、環境の変化に慣れるまでとても大変だったと思いますが、現在は自分なりに勉強の方法も見つけ、元気に通学しています。同じ奨学生として入学する学生たちとのコミュニティの中で、助け合っていってほしいと思います。私はほど良い距離を保ちながら、様子を見守ることができるように努めたいと思っています。

――最後に、東洋英和の学生たちにはどのような学生生活を送ってほしいとお考えですか。

私は、素直さのある学生は伸びていくと思っています。分からないことは分からないと言える、楽しいことは楽しいと言える、いけないと思うことはいけないと言える、そのような素直さ、反応のよさです。素直さを上手にバネとして使い、次の行動に変えられる学生が大きく成長していく姿を見てきました。だから、どのようなことでも疑問に思ったら言語化して、質問する力を身につけてほしいと思います。何だろうと思うことをきっかけとして次に進めます。そんな素直な反応のできる学生は少なくないはずです。

(※)花子プロジェクトとは、指定養護施設から高校に通う生徒を対象として、困難な家庭環境のために大学進学への選択肢が限定される高校生を総合的に支援し、社会に送り出すことを目指す人間科学科のプロジェクト。名称は、給費を得て東洋英和女学校高等科を卒業し、翻訳家・児童文学者として多くの業績を残した村岡花子の名に由来します。

ドアの内側には、娘さんが小さいときに描いた絵や手紙が貼ってありました

ゼミ生から一言

人間科学科２年
（左から）松原 美貴さん、白木 由莉さん、新井 杏佳さん

佐藤先生には、厳しいイメージがありますが、とてもやさしい先生です。基礎ゼミでは、江戸・明治期に日本を訪れた外国人が見た日本の社会や文化、人々をテーマにして、レポートの形式、発表の仕方などについても学んでいます。特に少人数のゼミなのでとても家族的で、勉強以外のことでも、ゼミ生が困っていれば助け合う関係になっています。これも、誰か困っている人がいたら協力するという佐藤先生の人柄によるものだと思います。

大好きなふくろうグッズがたくさん置いてあります

～原町聖愛こども園の子どもたちとかける虹の橋～

聖書科教諭　朴　洙美

主題聖句：
わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。
（ローマの信徒への手紙　一五章一～二節）

八月一日から三日まで、英和生二七名と園児一七名は軽井沢追分寮で夏期修養会を行いました。原町聖愛こども園(※)は、福島県の南相馬市にある社会福祉施設です。

原町聖愛こども園の園児とともに過ごすプログラムは今年度で五回目となりました。今回の修養会に参加した園児は、東日本大震災が起こった二〇一一年に生まれた子どもたちです。

夏休み前に「福島の子ども支援プロジェクト」の森高先生をお招きし、子どもたちとの接し方について事前学習会を行いました。二泊三日のプログラムの内容は、一日目は生活のお手伝い・鬼ごっこや花いちもんめなどのゲーム・キャンプファイヤー。そして二日目は千ケ滝まで移動して、林の散策と沢遊びでした。天候にも恵まれ、皆で本当に楽しい時間を過ごすことができました。

園児たちを先に寝かせた後、英和生たちはミーティングの時間を持ち、福島について学んだり、担当の子どもたちについて情報を共有する時間を持ったり、先生方のお話を伺ったりしました。一日目のミーティングでは、こども園主任の高田先生から、震災時から現在までのこども園の状況についてお話しいただきました。震災六か月後の園の再開から厳しい除染作業を続けつつ、園を守って来られた先生方の働きがあったからこそ、子どもたちが伸び伸び育ち、笑顔でいられるのだと実感しました。そして二日目のミーティングでは、実際に福島に行かれた押山先生（「福島の子ども支援プロジェクト」）より現地の状況を伺った後、生徒はグループに分かれて話し合い、その後発表を行いました。まだまだ放射線量の数値が高い場所があるということでしたが、福島に行ってみたいという生徒の声が印象に残りました。

最終日に行われた「虹の会」では、軽井沢で撮った写真を上映して過ごした時間を振り返り、皆で歌を歌ったり、こども園の皆さんからフラダンスや手作りの携帯ストラップなどのサプライズで素敵なプレゼントをいただくなど、心に残る時間を過ごすことができました。

子どもたちを見送った後、英和生一人ひとりが原町聖愛こども園の園児のために真剣に祈りを捧げ、軽井沢をあとにしました。後日、園児の保護者の方々からお礼のお便りをいただきました。

震災から六年が過ぎ、表面的には復興が進んでいるかのように見えますが、課題はたくさん残っています。その課題は前例がないものが多く、解決方法が浮かばないものもあります。しかし、人が人と触れ合い、ともに時間を過ごしていく中でこそ、相手に必要なこと、そして相手のために自分ができることに気づいていくのではないかと思わされる行事でした。今回のような貴重な体験を今後どのように活かしていけるのか、子どもたちの未来のために祈り続けながら考えていきたいと思っています。

このように充実した修養会を行うことができたのも、ひとえに「福島の子ども支援プロジェクト」の方々と、母の会の皆様の義援金付きの販売活動と募金活動、そしてその活動にご協力くださった方々のご支援のお陰です。そして福島の子どもたちの未来のために、その心のこもったご支援を用いてくださった神様の恵みに感謝いたします。

（※）二〇一六年より原町聖愛保育園は「原町聖愛こども園」と名称が変わりました。

楽しいキャンプファイヤー

千ヶ滝で全員集合！

園児たちのフラダンス

小学部食堂の一日

管理栄養士　川嶋　愛

小学部の食堂は、校内全体が見渡せる日当たりのよい二階にあります。四時間目の終了チャイムが鳴ると、ホステスたちが食堂に集まってきます。各テーブル二名のその週の給食お世話係です。こうして、給食時間が始まります。

小学部の給食は、全校児童・教職員が食堂で一斉に食事をいただきます。現在、全国の多くの小・中学校が教室での給食提供の中、小学部は食堂で提供しています。そこには、給食が単に栄養補給の役割というだけでなく、「愛餐」の意味が込められているからです。四年前に小学部の食堂の様子を初めて見たとき、全校一斉給食に感動し、どのように運営し、どのような料理を提供できるのかを楽しみにしていました。

給食室は、朝六時三〇分から作業を開始します。各業者から食材が納品され、一種類ずつ検収を行います。食材の状態は、当日の気候や納品状況、季節による影響で異なります。肉や魚は鮮度・匂い・大きさ、野菜は硬さ・大きさ・虫食い等がないかを確認します。食材の状態に合わせて、下味の入れ方、野菜の切り方を変更します。加熱作業も同様に、天板へ並べる肉の数の調整や、野菜などの加熱時間、かつお出汁の煮出す時間なども変えます。作業指示書（レシピ）に沿って行いますが、おいしい料理を作るために何通りもの作り方を試みます。子どもたちは大人以上に敏感な舌を持っているので、最終的な味を決定する時は必ず確認し、味の調整を行います。

料理が完成し始めたら、盛付け作業も開始します。クラス配膳の場合、各料理をクラス分の食缶（小学部でいうと十二クラス分）に用意しますが、食堂は四八テーブル分用意します。そして、ホステスが一〇分間で食事の準備を行うために、主菜・副菜は食器盛り付けとなります。食事を作り上げる目安は、通常は配缶直前ぐらいですが、盛付け作業があるため少し早めに仕上げます。学校給食法、食品衛生法の改正、ＨＡＣＣＰ（料理を作る際の安全を確保するために開発された管理手法）の導入など、調理環境が整えられるのと同時に法律も厳しくなっています。ルールを守りながら、食堂に五〇〇食弱の食事を並べるには、冷めても美味しさを感じ、盛付けに適したレシピを考えなければなりません。そして、限られた人材・資源を活用した提供方法も試行錯誤しながら考えます。

クリスマス給食

ホステスの配膳の様子

通常の給食以外にも、交流給食、六年生バイキング、クリスマス給食、ひなまつり給食などの行事食があります。その際は、テーブルが飾り付けられて食堂の雰囲気も変わります。料理も普段以上に手の込んだものを作るので、いつもより早い時間から調理に取りかかります。

ホステスが食事の準備を始めると、ごはんの盛付け方や食器の並べ方を教えます。その後、児童全員が揃い、お祈りをしてから食事をいただきます。子どもたちが食事を食べ始めると、ほっとします。

ホステスの準備から食後の片付けまでの一時間弱は、私にとって子どもたちと接する貴重な時間です。今日の料理で使用した食材の話やクイズをしたり、食べるのが遅い子、好き嫌いが多い子にも一口食べるよう食育を行います。また、どういうものが食べたいのか、苦手・嫌いな料理や食材は「どうして嫌いなのか」を詳しく尋ねます。それ以上に、授業での楽しかったこと、今流行っているもの、その日にあったこと、この授業の後はこんな料理が食べたいなど、子どもたちが教室での様子を教えてくれることは、献立を考えるヒントになります。同じ料理でも「違う味付けなら食べられるかも」と、一口チャレンジする心を持ってもらいたく、郷土料理や世界の料理も作っています。

私の願いは、二つあります。一つ目は、多くの料理を知り、食べたことのない料理でもまずは一口食べてみる心を持ってもらいたいことです。二つ目は、子どもたちにとって食堂での時間が、給食を通して楽しい場となることです。それは、嫌いな料理がでる日でも同じです。料理を美味しく作ることができても、児童全員が「好きな料理」はなかなかできません。嫌いな料理に箸が進まない子がいると、上級生のお姉さんが「おいしいよ、食べてごらんよ」と、勧めていることがあります。そういった会話のある場となってほしいと考えています。

食堂で給食を食べるには、先生方のご指導、ご協力がなければ成立しません。そのことに感謝しながら、子どもたちの食欲を掻き立てる料理に挑戦し続け、子どもたちの学校生活が充実したものになるよう、そして、成長の助けとなる給食を作りたいと思います。

絵の具でぺたぺた

砂場、おうちごっこ、虫探し、鬼ごっこ…子どもたちは毎日やりたいことを見つけて思い切り遊びます。その中で、年少組の子どもたちは一学期から毎日のように指絵の具を楽しんでいます。

指絵の具は指で広げて、その感触を楽しむ絵の具です。スプーンですくった絵の具を持ち上げると、子どもたちはスプーンをじっと見つめます。滑らかな机の上に絵の具がぽとんと落ちると、待っていましたとばかりに、手を伸ばします。その感触はひんやりとしていてとても気持ちがよく、子どもたちは夢中になって触ります。机が一面真っ赤になったり真っ黄色になったり…そのときの絵の具の色によって、子どもたちの体の色も机と一緒に変わります。机に指で模様を描いては消すを繰り返したり、壁に貼ってある白い紙に手形をぺたぺた押したり…。子どもたちは解放的な気持ちになって遊びます。また、色の変化の面白さもあるようで、白と赤を混ぜたら「ピンクになった」と驚いたり、赤と青を混ぜて紫になることに気づいたり…新しい色の発見を楽しんでいます。絵の具がついた腕や手をバケツの中で洗うと、色々なジュースの出来上がり。「ぶどうジュースくださーい」とほかの遊びをしていた子どももやってきます。

指絵の具のほかにも、足につければ足絵の具になったり、筆を使って大きな紙を思い切り塗りたくったり、多様な絵の具遊びを楽しんでいます。

幼児期はできるだけダイナミックに、気持ちを解放して遊んでほしいと願っています。

絵の具はきもちがいい！

「雨でも楽しい！」

―二〇一七年のうんどうかい、ファミリーデー―

二〇一七年の秋はこれまでになく雨の多い時でした。かえで幼稚園では二学期になると年長組を中心に庭で毎日毎日「うんどうかい」が行われ、かけっこ、綱引き、ダンスなどを楽しみます。ところが、雨続きで庭に出られません。「子どもの気持ちをどう受け止めようか」と教師会で話し合い「それならホールで『うんどうかい』をしましょう」ということになりました。次の日からのホールでの「うんどうかい」は室内ならではの年長、年中、年少のつながりと楽しさが生まれる時でした。「うんどうかい当番」の子どもたちがベンチを並べたり、「今日は何をしようか」とプログラムを考え準備をします。プログラムには「次は○○です。やりたい人は来てください」と保育室まで誘いに行きます。綱引きは長い廊下でし、「オーエス、オーエス！」という声が幼稚園中に響きます。「部屋でもうんどうかいは楽しい」と子どもも私たち保育者も感じていました。

こうして迎えた一〇月二十一日（土）大学でのファミリーデー当日、この日も朝から雨が降っていました。雨の中、ご家族と共に大学にやって来た子どもたちは体育館にきょろきょろしながらも、わくわくしています。ホールでのうんどうかいと同様にお互いがよく見渡せる室内だからこそそれぞれの取り組みや楽しさが伝わり見るのも動くのもおもしろい半日でした。

かえでの「うんどうかい」は雨の中でも子どもたちの中に楽しく心と体を動かす体験を残しながら秋深くなるまで続いていきます。

幼稚園の廊下で綱引き

ファミリーデー当日、大学体育館で

オルガン奉献二〇周年記念講演会・演奏会

昨年九月二三日に、新マーガレット・クレイグ記念講堂のオルガン奉献二〇周年を記念する講演会及び演奏会が行われました。当日は学院内外から定員いっぱい約三〇〇名の、このオルガンを愛する聴衆が集まりました。

記念行事は東京藝術大学名誉教授、廣野嗣雄先生の講演「賛美歌とともにあるオルガン」から始まりました。一時間という短時間の講演でしたが、オルガンという楽器の起源から説き起こし、宗教改革で会衆が賛美歌を歌うようになったこと、次第にオルガンがその伴奏を担うようになったことがパワーポイントによる資料映像を使って分かりやすく説明されました。また後半では五曲の賛美歌が聴衆によって歌われました。その伴奏（オルガン、三原麻里氏）はバッハの時代に中部ドイツで行われていた伴奏法によって行われました。各行の間（息つぎをするところ）に華やかな間奏が入る珍しいスタイルで、当時のプロテスタント教会の会衆賛美の雰囲気を味わいました。

東京藝術大学名誉教授 廣野嗣雄先生の講演

学院オルガニスト 河野和雄先生による演奏

休憩後の第二部は近年高等部を卒業してオルガン専攻で大学に進んだ卒業生たち（留学中を除く）七名、三原麻里、山口眞理子、野田優子、清水奏花、本田ひまわり、佐藤初音、栗山美緒さん、及び学院オルガニスト河野和雄先生の演奏でした。現在大学一年生から大学院在学中の学生、また卒業後ドイツやフランスに留学し、海外の大きなコンクールで優勝した実力者たちの演奏はどれもすばらしいものでした。

卒業生たちの華麗な演奏場面、また河野先生の曲では関連する映像がステージのスクリーンに映し出され視覚からも楽しむことができました。演奏曲も、ブクステフーデ、バッハなどのバロック、さらにシューマン、レーガーなどのロマン派、メシアン、ボヴェなどの現代の曲、またドイツ、フランスの曲と、このオルガンの持つ幅広い能力が示されました。

講堂の外ではいくつかの資料が展示されました。オルガン設置過程の写真、ビルダーとの交渉記録の一部、このオルガンを使って行われた対外的なコンサート、学会などのプログラム、最近のオルガン科（中高部課外活動）発表会のプログラム、また一九七〇年代に電子オルガンを使って行われていた「オルガン・メディティション」のプログラムなど珍しいものもありました。

昨年夏、初めての大規模なオーバーホールがなされました。二五〇〇本以上あるパイプはほとんど外され、すべて手作業で埃を払い、ゆがみを直し、整音しなおされました。その他の部分もすべて清掃、補修されました。宗教改革以前の楽器が現役であることから言っても、自然災害や戦争、火災などの不幸な出来事がなければ、良好なメンテナンスにより数百年の寿命を持つオルガン、これからもその力強く、美しい響きは末永く愛されてゆくことでしょう。

廣野先生、河野先生と卒業生オルガニストによる記念撮影

卒業生たちの軌跡を追って

この人に聞く 35

“現場と視聴者を繋ぐ架け橋”となって

フジテレビで定年まで38年間、そして現在はフリーのアナウンサーとしてご活躍されている益田さん。「決して自分が主役ではなく、現場と視聴者を繋ぐ架け橋としてのリポーターの仕事が好き」という思いや、テレビからも伝わる穏やかであたたかい人柄に、東洋英和での日々が繋がっていました。

フリーアナウンサー

益田（ますだ）　由美（ゆみ）さん

1973年高等部卒

――アナウンサーになったきっかけを教えてください。

実は勘違いから始まりました。当時フジテレビでは「アナウンサー」に「リポーター」という言葉を使っていました。それを知らずに就職課でフジテレビの「リポーター募集」を見て、アナウンサーは無理でもリポーターならと思って応募したのです。選考途中にアナウンサーだと知り、最後まで残らないと思っていたら、とび抜けてできなかったのが逆に目立ったようです。

――クイズ番組「なるほど！ザ・ワールド」では〝ひょうきん由美〟さんとして親しまれ、延べ一〇〇か国に行かれました。

当時フジテレビでは女性アナは四年ほどで退職する状況でしたが、五年目に入った一九八一年一〇月に、「なるほど！」が始まりました。当初国内リポーターでしたが、十一月にネパールに行くタレントさんが見つからず私が行くことになり、そこから国内と並行して海外リポーターもすることになりました。最初一桁だった視聴率は右肩上がりとなり、約半年間三〇％を割らなかったことも。でも、サバンナを猛スピードで走るトラックの荷台に立って動物園に送るキリンを生け捕りにする等、体力的にハードな取材が多く腰を痛めてしまい、自分でゴールを決めないといけないと考え、六年半で卒業しました。今置かれている状況を視聴者の方にお伝えするにはどうすべきかを二四時間考えてリポートしていましたが、このような番組と出会い、番組に育てられて幸せでした。

釣りの雑誌の取材（二〇一五年北海道にて）

――「なるほど！ザ・ワールド」卒業後のことを教えてください。

一生懸命走っていたのを卒業して歩くスピードになったら、日本の良さに気付きました。そして外国を見たからこそ見えてきた日本の良さをお伝えする番組を作りたいと思い、最後の二〇数年間で「益田由美のリバーウォッチング」「晴れたらイイねッ！」等、四本のレギュラー番組をアナウンサーとして初めて企画・プロデュースし、出演できたことは、とても幸せでした。入社六年目で女性アナの先輩が誰もいなくなり、レールもない中で何が今できるかを考えて進んできましたが、「なるほど！」卒業後の方が、私らしい仕事をしてきたと思っています。

――フジテレビ女性アナウンサーで初めて定年のゴールを切られました。

実は今でもアナウンサーが合っているとは思いませんし、テレビに出ることに執着していないので、定年までとは思っていませんでした。ただ、自分が主役ではなく、素敵な映像を皆様にお伝えするための架け橋・パイプ役としてのリポーターの仕事が面白くて続けてきました。ある新聞記者の方が、私のフジテレビ最後の番組を見て「ハッピーなテレビ人生だと思う」と書いてくださいましたが、その通りでした。

――英和での思い出を教えてください。

野尻キャンプに毎年行きました。当時はお風呂もなく洗顔もプールで！ でもそれが本当に楽しかったし、先輩がよく面倒をみてくれて。それから、六年間で一度だけあった駒沢での運動会。ぶっつけ本番の徒競走は、何年かぶりに思いきり走ったので最後に足が絡まって、ゴール直前で前に倒れて一着に！ 幼稚園から短大まで全校での運動会は英和らしくて、競うよりもみんなで一緒にというのが素敵で印象的です。そして英和に来て一番良かったのは、雰囲気がとても私に合ったことと、半世紀も続いている友達と出会えたことです。今も同級生と、先輩の絵画教室に通ったり、卓球チームを作ったり。英和に感謝です。

――「架け橋」としてのお仕事への思いや、あたたかいお人柄に、英和での日々が繋がっていると感じます。

「敬神奉仕」の、あの空気に包まれていたせいか、穏やかで競争心がないのかもしれません。英和の、ほわんとしているけれど一本芯が通っていて強い部分もある、そんなところが作用して、ここまで仕事をして来られたのかなと思います。英和をとても誇りに思っていますし、英和が大好きです。

BSフジ「ちいさな大自然」の取材（二〇一四年岩手県にて）

■ますだ　ゆみ／フリーアナウンサー。東洋英和女学院中高部、早稲田大学第一文学部卒業後、1977年フジテレビ入社。1981年から6年半の間、人気クイズ番組「なるほど！ザ・ワールド」の現地リポーターとして活躍。その後、自ら番組を企画しプロデューサーを務めるなど多様な活動を行い、2015年にフジテレビ女性アナウンサーとして初の定年退社を迎えた。

聖書の言葉

キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。

コリントの信徒への手紙二　五章一七節

私が小学校六年の夏、第二次世界大戦（太平洋戦争）が終わりました。少年時代を一貫して日本国が天皇を頂点とする神国であり、戦争には絶対に勝利するという、民族至上主義と軍国主義によって教育されていた私にとっては、文字通り世界が消えたような衝撃と不安の中に突き落とされる経験でした。翌日戸外に出て朝日を眺めたとき、それが黒く見えました。子供心にも、「暗黒の太陽」に見えたのです。

私はしばらくして、他学区であったために戦時中行かなかった町の教会の門を再び叩きました。そこで「日本第一」でなく、天地の創造主であり、人類の救い主である、生ける神を教えられました。「キリストに結ばれる」とは、「キリストの中にいる」「キリストの愛と命と力に包まれている」という意味であります。

理事長　大宮　溥

二〇一七年九月二九日　深井院長就任式にて

訃報

―心より哀悼の意を表します―

芝原　翠　氏　元短期大学職員、元評議員等　二〇一七年八月一日

佐久間　信子氏　元小学部教諭　二〇一七年八月二四日

丹羽　輝子氏　元幼稚園長、元評議員等　二〇一八年一月一七日

史料室レター No.24

「村岡花子文庫　書斎のなかの宝もの」展を開催中です

村岡花子が本に挟んだ「しおり」はどんなものだったでしょう？

花子さんは、大事な初版本などには、表紙に赤のマジックで「保存本」とか「保存版」と書き込みをしました。そして、「しおり」代わりには種々の紙類が使われました。友人の作家（吉屋信子）からの礼状など葉書を挟むことが多く、その他押し花、押し葉や名刺は普通ですが、出版社からの通知や展覧会のお知らせ、新聞記事の切り抜き、使用済み封筒、吸い取り紙、バスの回数券、はては一円札まで使っていました。こうしてみると、花子さんは読みかけのご本を置くとき、手近にあったものをチョイと挟んで次の仕事に向かったようです。

尊敬する片山廣子の告別式の通知は、ご著書「野に住みて」に挟まれており、そこにはあまり知られていない晩年の片山廣子の写真もありました。

こうした発見は、村岡家から学院に寄贈された村岡花子の蔵書類のうち、およそ一一五〇冊の和書についての詳細な目録を作成する過程での副産物です。

書斎に掲げられていた林芙美子の「花の命は短くて」の詩稿（隔月展示）や、「赤毛のアン」の絵、それから机回りのこまごました品々など、花子さんが机に向かって仕事をされていた息遣いの感じられる展示となっています。お近くにおいでの際はぜひお立ち寄りください。

村岡花子文庫展示コーナーにて取材に応える村岡恵理氏（10月13日）
取材内容は「日経おとなのOFF」誌2017年11月号掲載

現在開催中の企画展（～二〇一八年三月二四日）

- **「村岡花子文庫　書斎のなかの宝もの」**
- **「初公開！　校長室のスクラップブック―1889-1938 東洋英和のあゆみ―」**

史料室連絡先 ● TEL：03-3583-3166　FAX：03-3583-3329　E-mail：archive@toyoeiwa.ac.jp

「史料室だより」は全号ホームページで見られます。http://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications

英和☆星空探訪

文：北崎勝彦（高等部教頭）　題字・イラスト：北崎直子　Vol.18

ブルームーン

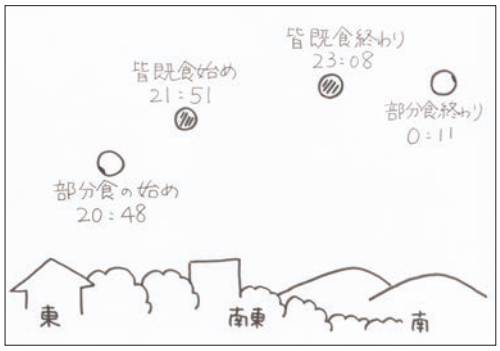
表題の「ブルームーン」という言葉をお聞きになったことのある方も多いのではないかと思います。これは天文現象ではありません。人間が作った暦と月の関係です。

ブルームーンは昔からアメリカの一部地域で使われていました。春分・夏至・秋分・冬至のそれぞれの間隔はほぼ三ヶ月で、この間に満月は通常三回あります。しかし満月から満月の間隔はおよそ二九日と半日。三回の満月の周期は三ヶ月弱ですので三年に一度くらい四回になる事があります。その四回となった満月のうちの三番目をブルームーンと呼んでいました。これを七〇年ほど前、アメリカの天文雑誌が「一ヶ月のカレンダーの中に二回満月があった場合、二回目をブルームーンと呼ぶ」と間違えて紹介してしまいました。これが現在ではすっかり一般的になって広まっています。決して月が青くなるわけではありませんが、こんな話題で夜空を見上げてみるのもまた楽しいと思います。

そして、今月、二〇一八年一月は二日と三一日が満月です。つまり三一日はブルームーンです。今回は特別で、ブルームーンが皆既月食となります。ブルームーンならぬ赤銅色の月が見られそうです。久しぶりに見やすい時間帯の皆既月食、楽しみにしています。

ところで、ブルームーンというカクテルがあるのをご存知でしょうか。花に花言葉があるように、カクテルにも意味がそれぞれあるそうです。男性と一緒の時に女性がこのカクテルを注文するということは…ブルームーンは「滅多にない」こと…つまり「この恋は難しい、あなたはお断り」という意味なのだそうです。女性の皆様、ブルームーンカクテルを頼む時はご注意ください。

1ヶ月のカレンダーの中に満月が2回、その2回目がブルームーン。今年は3月もブルームーンとなります。前回のブルームーンは2015年8月、次回は2020年10月です



1月31日の皆既月食の見え方。今回は空の高いところで月食が起こります。特に皆既食が終わる頃には頭の上の方に月が昇っています

後援会より

● 2017年度後援会役員懇談会報告

10月13日(金)、後援会役員懇談会が東洋英和女学院中高部校舎および国際文化会館にて開催され、学院側も含め約120名が出席しました。分科会は、学院各部を8つのグループに分けて行われ、カリキュラム、クラブ活動、英語教育、キャリア教育などについて、後援会役員と教職員が忌憚のない意見交換を行いました。

全体会

高等部部門の分科会

お知らせ

●「楓園」が新しくなります

2018年度より、学院報「楓園」と東洋英和楓の会会報誌「KAEDE MAGAZINE」が統合され、新しい「楓園」が年2回(6月と1月)発行されます。

次号楓園86号は2018年6月初旬発行の予定です。どうぞお楽しみに。

東洋英和女学院 学院報　**楓園**　第85号

発行日：2018年1月31日
編　集：広報委員会
発　行：学校法人 東洋英和女学院　東京都港区六本木 5-14-40　Tel：03-3583-3325
メールアドレス：koho@toyoeiwa.ac.jp　ホームページ：http://www.toyoeiwa.ac.jp

同窓会より

● 同窓会クリスマス礼拝報告　2017年12月2日(土)

例年通り、同窓会クリスマス礼拝が12月第1週土曜日に、新マーガレット・クレイグ記念講堂にて守られました。約300名の同窓生が集い、大坪園子牧師(日本基督教団熊谷教会、高等部1997年会友)より「私たちが生きるために」と題して説教をいただき、大学オーケストラ部の奏楽で「ハレルヤ」を心を合わせて賛美いたしました。

礼拝後、新院長・深井智朗先生にご登壇いただき、新しい学院の歩みのはじまりに期待の高まるお話をいただきました。

その後のクリスマス・ミニコンサートでは学院オルガニストの河野和雄先生のオルガン、Carillonneuses K（中高部ハンドベル部OGグループ）によるハンドベルの演奏に心を洗われ、お茶の会では同窓会伝統のフルーツケーキをいただきながら、笑顔の溢れる歓談のひとときとなりました。